

伏見城跡・指月城跡 現地説明会資料

京都市文化財保護課
令和元年9月23日(月・祝)

所在地：京都市伏見区桃山町泰長老

調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査期間：令和元年8月19日～9月末(予定)

調査面積：約145㎡

調査要因：遺跡の範囲内容確認のための発掘調査(文化庁国庫補助事業)

■ 年表 ■	
1592	指月屋敷【Ⅰ期】
1593	豊臣秀頼誕生
1594	城郭に改築(指月城)【Ⅱ期】
1596	慶長伏見地震により指月城倒壊
1597	伏見城(木幡山)築城【Ⅲ期】
1600	関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失
1601	伏見城再建(徳川家康)【Ⅳ期】
1623	廃城

1 伏見城の歴史

伏見城は、豊臣秀吉によって築かれた城で、築城から廃城までの約30年に4つの画期が想定されています(年表参照)。

文禄元年(1592)、現在の観月橋団地一帯の「指月丘」に、秀吉が隠居所として屋敷を築きはじめ(Ⅰ期)、翌年の文禄二年(1593)の秀頼誕生を機に、屋敷を本格的な城郭として改築します(Ⅱ期)。しかし、文禄五年(1596)に起こった大地震で、城や大名屋敷が倒壊するなど大きな被害を受けました。翌年、秀吉は指月城の北東に位置する木幡山(現在の明治天皇陵付近)に城を新たに築きます(Ⅲ期)。この際、城下西側を中心に武家屋敷や城下町の整備も行いました。秀吉は晩年をこの城で過ごし、慶長三年(1598)に生涯を閉じます。

秀吉死去後、慶長四年(1599)に徳川家康が入城しますが、慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦の前哨戦で、豊臣方から攻められ主要な建物は焼失しています。同年の関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家康により、翌年(1601)には伏見城の再建が始められ(Ⅳ期)、慶長八年(1603)には征夷大将軍宣下をこの城で受けます。元和元年(1615)の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡し、伏見城は城郭としての役割を終え、元和九年(1623)に廃城となります。廃城の際には、石垣一石まで破却せよとの厳命が下ったため、構築物は残っていませんが、現在でも地形や一部残存する石垣などから当時の伏見城の様子を窺い知ることができます。

2. 調査地について

平安時代には橘俊綱が山荘を、後白河上皇や後深草上皇が御所を営んでおり、風光明媚な地として知られていました。指月城倒壊後に木幡山に城が移ってからは大名屋敷地となり、『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』(図1・京都市所蔵)上では、初代唐津藩主「寺沢志摩守(寺沢広高)」、豊臣秀吉・徳川家康の政治プレーンとして活躍した禅僧「泰長老(西笑承兌)」の記載がある場所にあたります。伏見城廃城以降は、周辺の名古屋敷もその役目を終え、明治末年頃まで

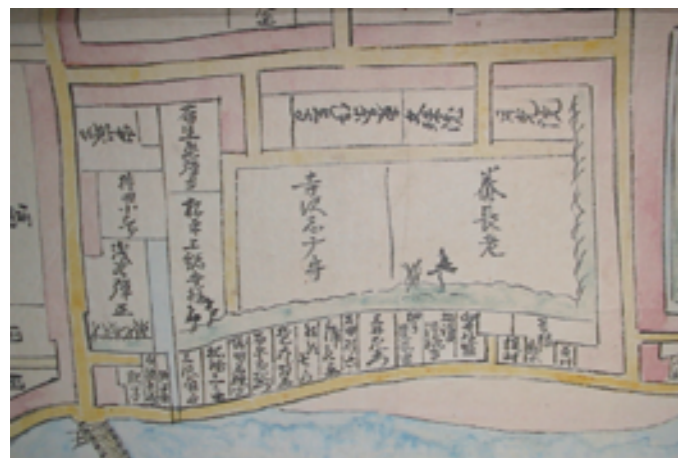


図1 『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』による調査区周辺

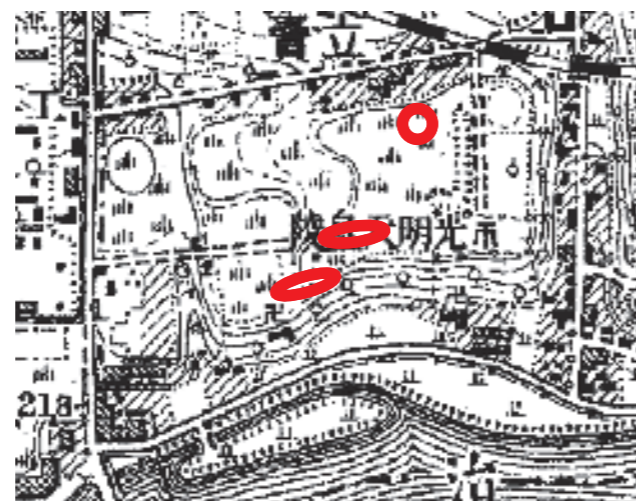


図2 大正元年正式図による調査区周辺
(囲みは今回の調査地点)

は山林だったようで、大正元年(1912)の正式図(図2)では旧地形を推察することができます。明治末年頃から終戦まで伏見に駐屯していた京都師団工兵第16大隊の作業場となっていました。戦後は畑地でしたが、1960年代前半に観月橋団地が建てられ、現在の景観が形成されます。

3. これまでの調査成果について(図3)

2015年度に調査3で南北方向の西面石垣を確認しました(写真2)。この石垣を指月城段階のもののみならず現地説明会を開催していますが、その後の補足調査により、その石垣よりも古いと断定できる東面石垣(写真3)が見つかったことから、これを指月城段階、前者を木幡山城段階と考える意見が一般的です(図5)。

2016年度にも南北方向の東面石垣(調査4)を確認していますが、これは伏見城の時期の造成土で覆われていたことから、伏見城の中でも前半段階、すなわち指月城段階のものと判断されます。

調査1では濠状の落込み、調査2では北西角となる石垣、調査5では石垣や造成土を確認しており、今回の調査地一帯に指月城が存在した可能性が高まったことから、京都市文化財保護課では2016年度から継続的に調査を実施しており、今回は第4次調査となります。

これまでの調査成果をまとめておきます。1区では北面石垣を検出し、西側では石垣の高さから2m以上の深さとなる造成土を確認しています。2区では指月城築城以前の地表面と指月城で使われた金箔瓦が出土しました。3区では伏見城期の柱穴を確認しました。塀の控え柱等となる可能性があります。また団地造成に伴う現代の盛土が非常に厚いことが判明しました。4区では溝状遺構を確認したが、時期は不明です。5区では、2区と同じ旧地表面を確認し、これまでの調査中で最も多く陶磁器が出土しました。ただし、武家屋敷の時代のものとは判断できません。6区では、江戸時代のものながら、指月城跡一帯に特有の地割を踏襲した溝を確認し、ここが指月城の城域に含まれる可能性が高いことが判明しました。

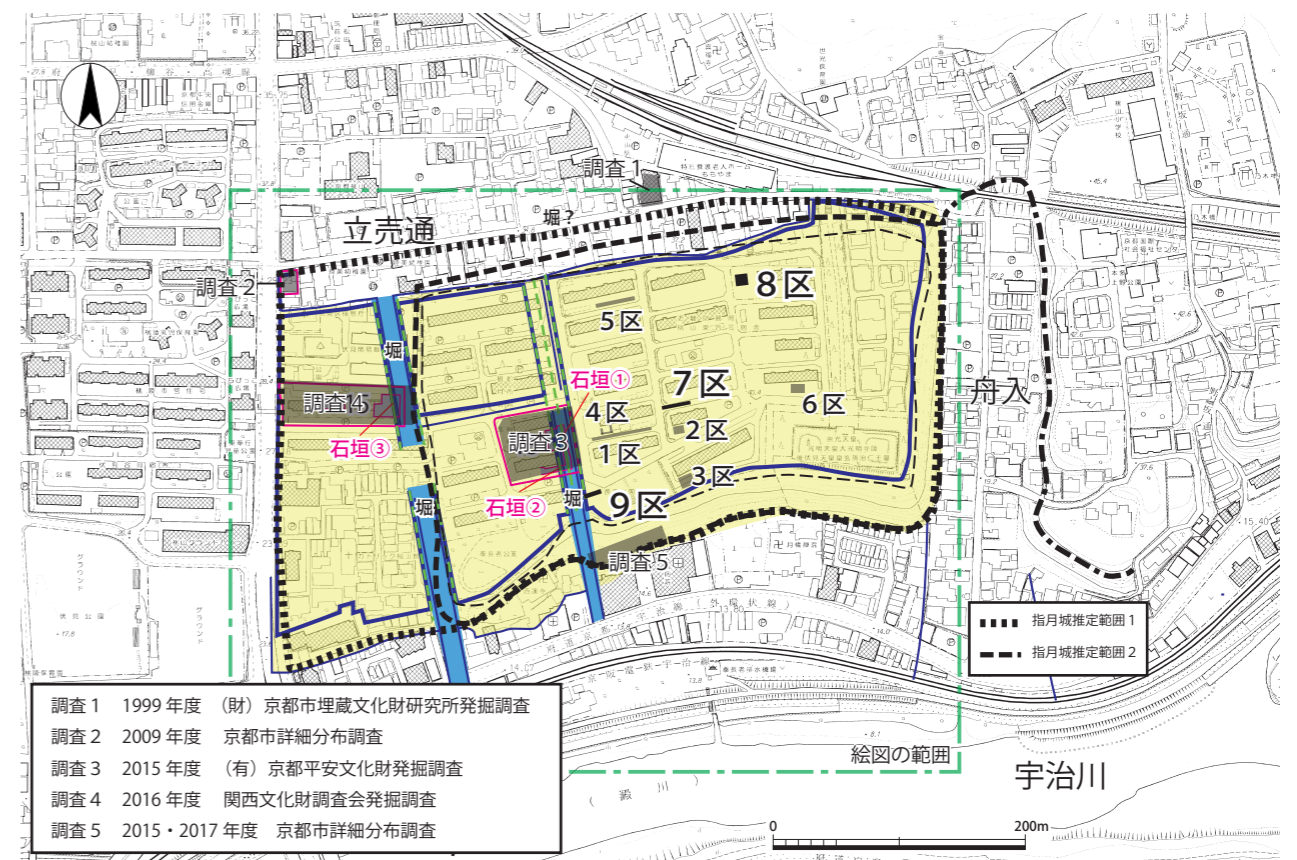


図3 これまでの指月城復元案と今回の調査位置(1:6,000)

3. 今回の調査成果について（図4・5，写真1）

今回の調査のうち，9区では石垣および大規模な造成土を確認しました。石垣は3石の石材と裏込を検出しました。裏込および石垣下の造成土中からは瓦が出土していることから，伏見城の最初期段階（指月城段階）にさかのぼる遺構ではないと判断できます。造成土は3.3m以上の深さに及んでおり，調査3で確認した石垣①・②よりも深くなります（図5参照）。これにより，石垣①は伏見城初期段階よりも新しい段階のものであることが確定しました。また，石垣②の天端よりも深くなったことで，9区が伏見城初期段階の堀の中であると判断できます。2016年の1区では，調査区西側で，武家屋敷段階以前の大規模な堀状の段差を確認しており，これが堀の東肩である可能性が高まりました。石垣②とその段差の距離から，堀幅は30m以上であると推定できます。従来の想定（図3）の倍以上となり，これは二条城の内堀（幅25m）を凌駕します。指月城が秀吉の居城にふさわしい堀と石垣を備えた城であったことが明らかとなり，同時に伏見城の歴史の中で極めて大規模な造成をおこなっていることも判明しました。

8区では，陸軍工兵隊の作業場として用いられたことを裏付けるように，塹壕跡を確認しました。塹壕は複雑に折れ曲がり，実戦を想定した訓練をおこなっていたことが分かります。排水用の小溝や昇降用と考えられる段差を有しており，塹壕の構造には工夫がこらされています。しかし，本来あるべき深さよりも浅く，上面が削平されている状況と考えられます。伏見城期の遺構も同じく削平されていると見られ，全く確認できませんでしたが，遺構面の想定標高は，これまでの調査地点よりも高くなることから，中枢的な施設の存在を推測できます。

4. まとめ ー指月城の復元についてー

これまで4年間の調査によって，旧地表面や造成土の標高が判明してきました。東で高く，西に向かってひな段状に低くなっていくことが分かりました（表1）。北東の8区では，上面を削平されているにもかかわらず，最も高い標高で伏見城築城以前の堆積を確認していることから，天守などの主要施設は北東に位置したのではないかと推定できます。

また，豊臣秀吉の居城にふさわしい堀と石垣を備えていることに加え，推定範囲の全域で金箔瓦が出土していることから，多くの建物が金箔瓦で荘厳されていたことが分かってきました。現地形は，指月城段階から大きく改変されており，今後も発掘調査が果たす役割は大きいと言えます。指月城の調査は緒に就いたばかりであり，今後の調査によって，さらに具体的な姿が明らかになると期待できます。

表1 指月城段階の遺構面標高

1区	36.5m
2区	37.4m
3区	36.5m
4区	36m
5区	37.7m
6区	39.5m
7区	37.3m
8区	40.5m
9区	29.6m以下
調査3	30.0m
調査4	27m

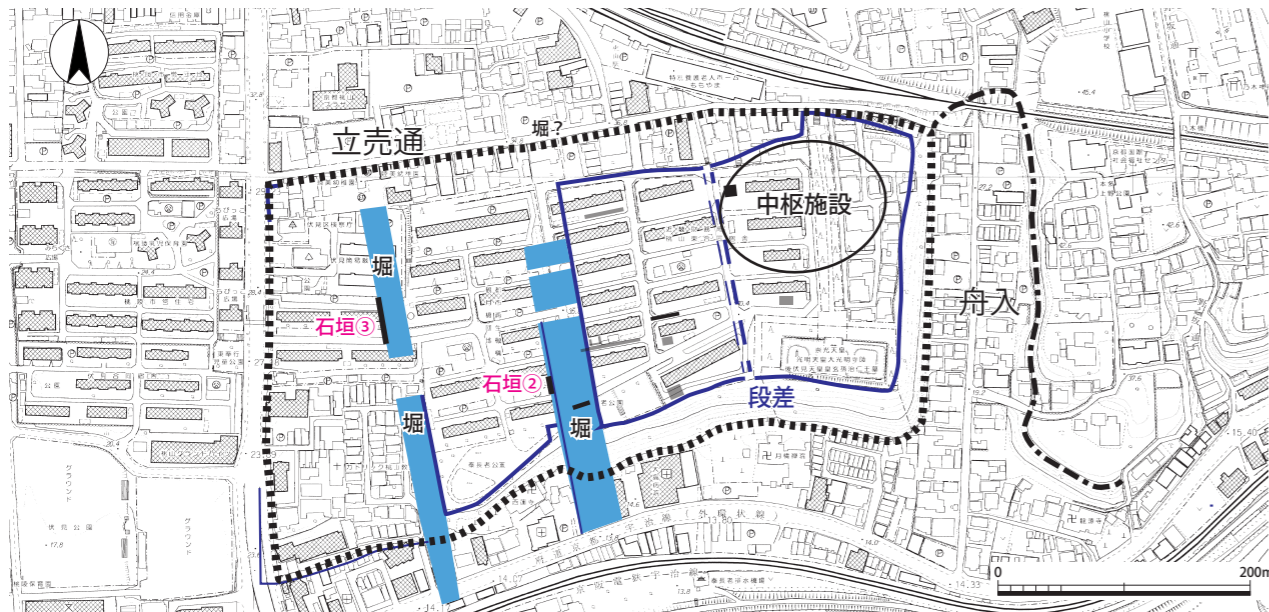


図4 指月城復元図（案）（1：6,000）



写真1 9区検出石垣 南西から



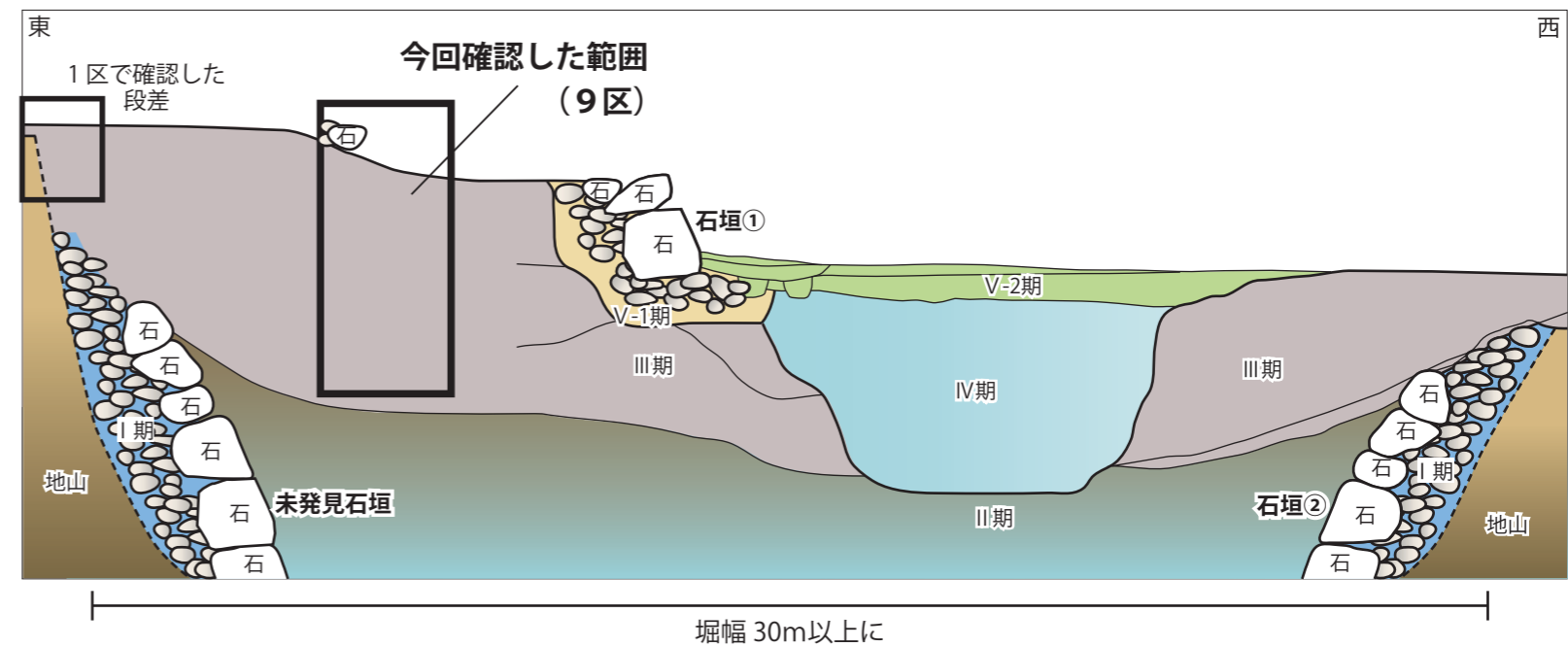
写真2 調査3検出V-1期石垣① 北から



写真3 調査3検出I期石垣② 東から



写真4 調査4検出石垣③ 北東から



- I期：石垣②と当初の堀を造成した時期
- II期：石垣②と当初の堀の機能が停止した時期
(文禄5年【慶長元年】大地震か?)
- III期：堀跡の埋め戻しをした時期(造成土)
- IV期：規模の小さな堀の築かれる時期(III期と同時期の可能性がある)；武家屋敷境の堀?
- V-1期：武家屋敷地拡大に伴い堀を埋め立て石垣①を構築する時期
- V-2期：下段の屋敷地を拡大するために整地した時期
(V-1とV-2は同時並行で施工されたと考えられる)

図5 調査3と今回の文化財保護課調査地点（1・9区）石垣・堀構築概念図（案）